

シルクロードの今—新疆ウイグル自治区を

たずねて、ムスリム墓・トイレ・チャドルなど—

寒川高等学校 佐藤雅信

はじめに

今回の旅程は以下のとおりであった。

- 819 北京↓ウルムチ
 - 820 カシユガル↓カラクリ湖
 - 821 カシユガル(ホジャ墳・イテイガールモスク)↓南疆鉄道
 - 822 クチャ↓キジル千仏洞
 - 823 クチャ(キジルガハ石窟・スバシ古城・クチャ古城)
 - 824 クチャ↓砂漠公路↓ニヤ
 - 825 ニヤ↓西域南道↓ホータン
 - 826 ホータン(マリカワト遺跡・オートカン遺跡)
 - 827 ウルムチ↓トルファン(交河古城・高昌古城・アスターナ古墳・ベゼクリク石窟)
 - 828 ウルムチ↓北京(古陶文物美術館)
 - 829 故宮・恭親王府・北京社会科学院考古研究所
 - 830 梅蘭芳博物館
- 主催は鎌倉市日中友好協会。筆者自身の旅のコンセプトは「ムスリムの生活」「仏教遺跡」「砂漠体験」、つまり「授業に使える教材を探す」。従って、モスクが見えたら寄る／お墓が見えたら寄る／トイレにひるまない／ムスリム雑貨をバザールで値切る。本稿では紙面の都合があり、砂漠体験・仏教遺跡巡検・遺跡観光業と漢人・

北京独占の考古史料等に触れることができない。秋季の発表では六〇枚の画像をお見せしたが、「ムスリム生活」に絞って報告する。カラーページを参照されたい。

一 新疆ウイグル自治区の現状

新疆ウイグル(維吾爾)自治区(Shinjang Uyghur Aptonom Rayoni)、面積一六〇万平方^キ。中国の六分の一。主要民族ウイグル人「回鶻」。ウイグル語はトルコ諸語の東部方言、話し手人口八百万人以上。ウイグル人比率はホータン地区で最も高い。以下四市にはそれぞれ雅称がついている。

- ・「壮麗なる国カシユガル(Azizana Kashghar)」人口最大の町
- ・「聖者の国ヤルカンド(Dirana Yarkand)」スーフィズム教学の古都
- ・「異人国トルファン(Sharibana Turfan)」イスラーム僻遠の地
- ・「殉教者の国ホータン(Shahidana KhoTan)」古来からの玉の産地

◎カシユガル(喀什) 人口約二五万人。ウイグル七〇%。以下略史前二〜八世紀西域三十六国「疏勒」、後漢「西域都護府」

- 九世紀 ウイグル帝国崩壊で東方から移住
 - 一〇世紀 カラハーン朝「カシユガルハーン」
 - 一六世紀 宗教貴族ホジャ家支配、オイラートのジュンガル拠点
 - 一八世紀 乾隆帝占領(一七五九年)で清領「新しい領土ハミル」
 - 一九世紀後半以降 ヤクープベクの乱、露&英進出と「同治回乱」
- 中国当局は「東トルキスタン回教共和国」と中央アジアと連動したテロを警戒しているというが、表通りの繁栄にはそんな気配は微

塵もなく、バザールはいつも人であふれ、観光客も多い。主たる産業は農畜産物、紡績・製糸・皮革工場、パキスタン（キルギット）とのバーター制「辺境貿易」はNHK「新シルクロード」映像で知られるようになった（今回は、中巴公路の途中、海拔三八〇〇mのカラクリ湖まで行けた。「カシユガルに來なければ新疆に來た事にはならない」皆口を揃えて言う。

◎ホータン（和田）ウイグル語「入ると出られない」タクラマカン砂漠南縁の西域南道に位置。人口十五万の九七％はウイグル（他に漢族・回族・クルグズ・キルギス・タジク）。「西部大開発」により天山南路のルンタイ・ニヤのあいだに「タリム沙漠公路」が開通し、石油関連産業の発展が急である。また「玉バブル」で中国人バイヤーが常駐。さらに漢人資本ホテル・漢人経営（利用者もほぼ漢人）のスーパーマーケットが次々建設中で、いまウイグル社会はバブルの真っ最中。当然のように貧富拡大と「一攫千金」風潮の蔓延はウイグル若年層へ深刻な悪影響をおよぼしつつある。

二 ムスリムの墓制について

ムスリムは「土葬」が原則。火葬は「地獄での罰」「最後の審判で復活」できないので忌み嫌う。日本でも数年前、身元不明外国人遺体としてイラン人が火葬され、イラン政府の抗議を受けた。外国人ムスリムの遺体処遇は遺族も当該自治体も苦慮している。ムスリムの墓は一定期間の利益で永代使用＝墓地区画の販売ではない。墓地の在り方自体が異なるのである。（ようやく日本ムスリム協会の努力で日本人ムスリムのための墓地が山梨県に作られた）

ではウイグル人ムスリムの墓はどのようなものか。ムスリムの墓はマザール【MAZAR】と呼ばれ「訪れるべき場所」の意味。「聖者の墓」「聖廟」もマザールで、中央アジアではスーフィズムにかかわる用語。「中央ユーラシアを知る事典」の堀川徹によれば、「預言者の血筋・教友・歴史上の偉人・スーフィーのシャイフ（導師）の墓」「冥界と現世をつなぐ窓口」。一五世紀以降スーフィーが参籠し「シャイフの霊との交信」、「靈的教導の場」とある。同じ書の新免康の『新疆のマザール』では、病氣治療・子授けなど「現世利益」預言者崇拜・スーフィズム・十二イマーム派の影響、「聖墓」には祝福を授ける呪力（パラカ）が宿る。聖者の年忌・誕生日は「祭」で市がたち、「木曜の夕べ」には遠方から参詣者がくる、とある。このような廟は「大マザール」と分類される。そして辺鄙な場所にある「中マザール」（そのなかには有名聖者の「偽マザール」なる興味深いものあり。後述）、さらに一般信徒の墓「小マザール」とあわせて3つに区分される。

（一）「大マザール」 「街なかにある聖廟」の代表がカシユガルのホジャ墳、通称香妃墓である。白山派首領アバ（アバク）・ホジャが一六四〇年に建立、四隅にミナレットを持つ。土とレンガ造りで鉄は不使用。ドームの高さ二五m、直径十七m。

香妃（清朝記録では容妃）、イパルハン・ムムラエゼムは一七三四年ヤルカンド生まれ。砂棗（スナナツメ）の花で体を清めたので体中から香りが漂うのでイパルハンと呼ばれその漢訳が香妃。本名はムムラエゼム。二十六歳で乾隆帝に召され、五十六歳で死去。「帝の求愛を拒み自殺」「故郷を想うあまり病死」また「皇太后に殺された」三説ある。遺体を移送した輿がドームにあり、地元では

「皇帝の愛を受け入れ長く共に暮らし、亡骸は三年かけカシユガルへ返された」「墓には彼女の衣冠だけが納められ途中で埋葬した」等々。香妃墓は北京の東陵にもあり柩もある。ハナシの相違を民衆はいちいち突き詰めようとはしない。

主墓室にはアバ・ホージャとその父、及び5代七十二の柩が並ぶ。棺の大小は生前の社会的地位により異なり、また棺には男女、さらに死亡年齢により色違いの錦織が懸けられている(若死の場合は明るい色、老年の死者には地味な色)。香妃の棺は右奥、黄色いリボンがかかっている小ぶりなものである。説明では遺体は棺の下の地下2mに埋められている(笑)。

廟に隣接して一般人の墓がある。横円筒形の墓は個人用、ドーム型の墓は家族墓。遺体は北向き頭・西向き顔(メッカの方向)で埋葬される。ホージャ墳のそばに葬られるのはステータスで富裕クラスの墓である。なお入口横の古いモスクには遺体を運ぶためのストレッチャヤー(木製と金属製の枠の2種)があった。遺体はこれに乗せられ布を掛けて運ばれ(布に包まれて)埋葬されるようだ。

(2)「小マザール」一般庶民の墓は道路わきや畑の隣りなど「生活隣接」に設けられている。手入れがされているもの、荒れ放題のものもある。道路わき、商店裏など「見えるところ」にあり、土で盛りあげた玉葱型、棺おけをイメージした形などが並ぶ。建物も無くただ墓が広がる。九割がこのタイプ。墓地の基本は「街なか」。死者は生者の隣りに葬られ、いつの日か来る「最後の審判」を待つのである。オアシス外の砂漠のなかにある漢人の墓(円錐形に土や小石を盛りあげ、墓参りの供物がある)とは好対照。霊(鬼)となつて生者から離脱する儒教・道教との死生観の違いがうかがえる。

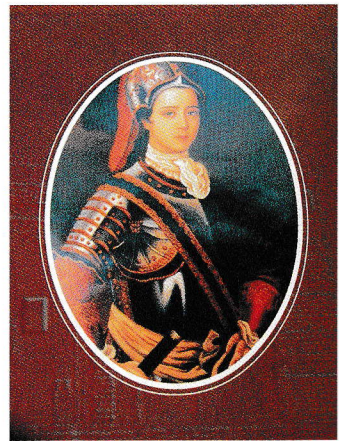
(3)「中マザール」今回の旅行では未見だが、新免氏の研究によるとホータンには沙漠の中、断崖絶壁、山岳などに「中マザール」があり、信徒は巡礼シーズンにだけ大挙して参拝する。建物は粗末で小さく祈祷所があるだけだが、遠方地域から信者が集まり社会的影響力は大きいという。西方イスラーム世界で著名な聖者たちの「マザール」が数多く存在する。ニヤ県の北の大麻扎(大マザール)と呼ばれる聖者廟はシーア派十二イマームの六代イマーム・ジャール・サーディクの墓所と信じられている。しかし彼の墓はメデナに現存し、ホータンの墓は「偽」である。他にも四代目から十二代目マフディまで九人のマザールが揃い、イマームの親類縁者やガツザリーの墓もある。これが「偽マザール」で新疆のイスラームがイラン経由で伝来したことが要因らしい。ウイグル人は公式にはハナフィー派法学のスナナ派信徒だが、清代の文献ではシーアの「アーシュラー」的宗教儀礼が報告されている。

ホータンでは近代に至っても殉教者を祀るマザールが作られた。一九世紀後半、ヤークープ・ベグ政権に先立つアブドゥラフマン(一八六五)は「殉教歌謡」が歌い継がれる英雄である(注を参照)。ホータン西郊アトチュイの彼のマザールは信者の寄付(費用一五万元)によって一九九三年に建て替えられているが、各時代の政治権力は大衆の支持確保にこれを利用し、清朝も新疆征服後マザール保護に転じた。現中国政府もマザールを「文物保護単位」とする一方、「宗教活動所および参拝地の管理強化に関する通知」が出され、居住地域での「参拝許可」「通行証購入」「参拝登録」を義務づけている。一九九〇年代、幾度か政府当局とムスリムとの間で衝突が発生し、マザール参拝も厳しい管理体制が敷かれている。

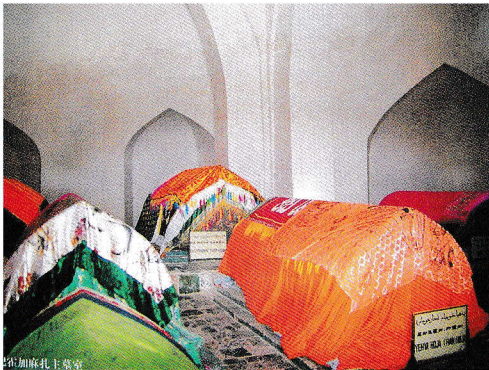
二 ムスリムの墓制



1 香妃墓前景（香妃に扮した女性と一緒に記念写真）



2 香妃像
（絵葉書 カスティリオーネ）



3 墓室（写真はがき 墓室内は撮影禁止）



4 香妃墓横の墓①



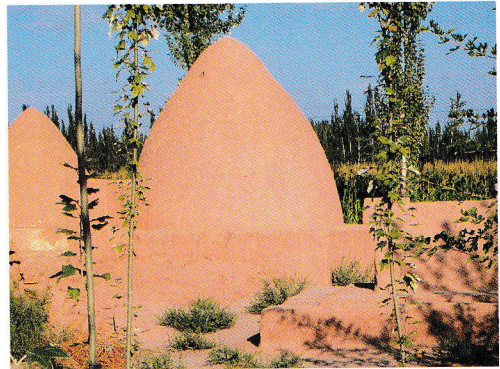
5 香妃墓横墓②



6 ストレッチャー（手前木製、奥金属製）



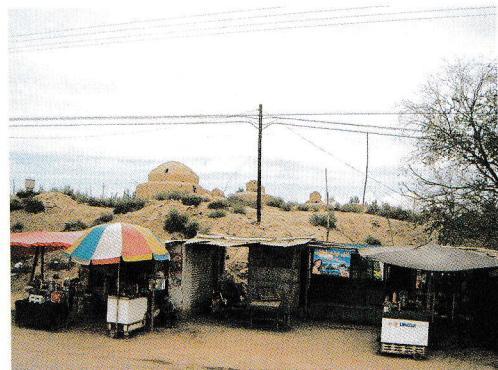
7 カシュガル道端霊園①



8 カシュガル道端②ドーム型



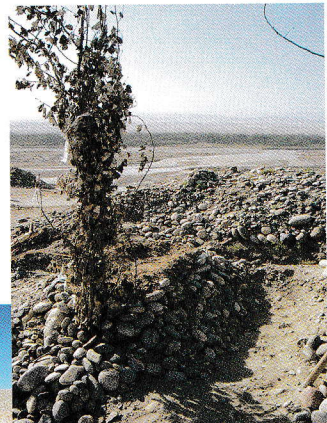
9 カシュガル道端③棺桶型



10 クチャ道路裏（丘の上）



11 ウイグル古墓①柵ありホータン郊外

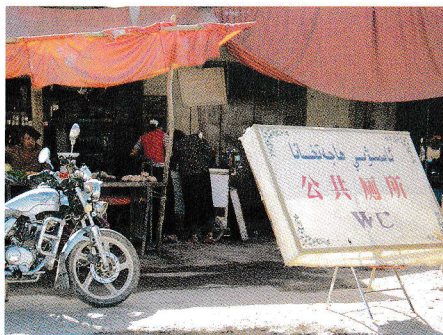


13 同ウイグル古墓③



12 同ウイグル古墓②墓穴

三 トイレ



14 中巴行路の有料トイレ①前景



15 同②大便個室 (しきりあり)

16 同③上から覗くと



18 同②内部男性用



17 ホータン ヨートカン村トイレ①



20 クチャ古城址石碑

19 クチャ古城址 城壁 (足元は人糞だらけ)

四 チャドルと女性



21 ウィグル踊り子① (ホータン賓館)



22 衣装セット
(5~7歳用
ウルムチ空港)



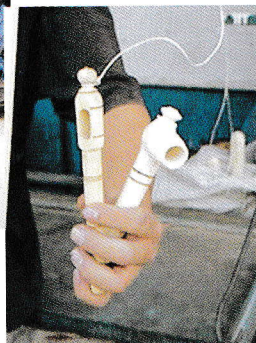
25 ムスリム帽
(ホータンのバザール
20個まとめ買いで値
切る)



23 チャドル女性①カシュガルバザール



24 チャドル女性②



29 シュメーク②拡大
(男女用) 乳児用の尿器
具シュメーク。
男女形状が異
なるが一見笛
のよう。
排尿穴のあ
いた乳児ベ
ッドに足を縛
り寝せてお
くと真直ぐな
足に育つと
いう。

五 ムスリム生活具



26 ハラルソーセージ (機内食)



28 竹製ヘルメット (風通しがよい)



27 清真ラベル拡大



30 シュメーク①カシュガル職人街

注（アブドゥラフマン）一八六四年、新疆ではクチャ蜂起を皮切りに
全域でイスラーム教徒の叛乱が勃発。彼はクルアーン学校の弟子
を率いホータン城を三日で攻略した。しかしクチャのホジャ政権
はヤルカンドのトゥンガン（「東干」漢語を話すムスリム。現在
の回族）と連合しホータンを攻め、一八六五年、アブドゥラフマ
ンは戦闘中に被弾し死亡するもホータン側は勝利。これによりホー
タンのムスリム政権が成立。コーカンド・ハン国のヤークープ・
ベグ登場までの数年間勢力を維持した。（新免康）

（4）ウイグル古墓

ホータン市街地南のオアシス域の外側、玉竜喀什河を望むホータ
ン郊外の小高い丘の上にウイグル墓があった。生活近接のムスリム
墓とは異なる墓制である。丘の上に穴を掘り遺体を納め、小石を積
み上げ、乳児用ベッドのような木枠の墓室を組み子ベット風の柱と
布の墓標を立てる。オアシス民本来の墓制らしいが、イスラーム進
出により廃れつつある。しかしオアシス域内マザールにも一部木枠
が残っており、この墓制が全て失われたのではないようだ。

三 トイレ

トイレは溝か穴があるだけ。「しゃがむ」地域に属す（「腰かける」
は地中海沿岸まで）。中巴行路沿い宿場の有料公衆トイレでは二〇
cmほどのペーパーをくれた。大のほうは一m位の仕切りがあり使用
後水で流す「水洗式」。料金は二角。流石にカシユガル大バザール
内のトイレ（五角）はマトモな水洗式。ホータン郊外ヨートカン村
の共同トイレは男女用に分かれるも穴があるだけ。すぐ乾燥するの
で汲取りの必要はない。東南アジアの「水洗（みずあらい）式」と

は違い、乾燥気候に合うのかも。「水洗（すいせん）」トイレは「手
紙」（中国語ではトイレットペーパーのこと）と一緒に流せない根
本的欠陥がある。バス・トイレの排水能力の低さは水管の細さによ
るもので、拭いた紙は便器横ゴミ箆へ。だが現地の人は青空タイプ
が多いので遺跡の中も格好のトイレ場になっている（クチャ古城
址）。

四 チャドルと女性

ウイグル女性は服装が派手。スパンコール付きのワンピースや原
色スカート、頭には必ず被り物。女性帽は後ろに三つ編みにした毛
糸が何本も長く垂れてとても優雅である。ちなみに折り畳みできる
男性帽もキラキラ飾りがついている。

また刺繍の入った白い帽子は「回族」の夏用で、ムスリムの証と
しての意味合いがあるようだ。子供でも耳にピアス、胸にはネットク
レス。顔立ちも彫りが深く目もパッチリ。立居振舞も気品がある様
に感じる（ずうずうしく声高、扁平顔で不細工な漢人に比べると）。
最西の町カシユガルには、その他カザフ、キルギス、シボ、青い目
のウズベク、タタール、パキスタン人など民族色豊かであるが、他
の新疆諸都市と違うのは女性の「チャドル度」である。新疆におけ
るその「西高東低」はそのまま「ムスリム度」につながると思われ
る。ウールで編んだやや厚手で茶色の布は、広げると単なる四角形
で、編み方が粗い部分があり前方が見える。しかしカシユガル以外
では街なかでほとんど見かけない。ほぼ綿か絹のスカーフで代用し
ているし、顔を隠す場合も信仰からでなく埃を防ぐためである。

五 ムスリムの生活用具

写真ページ参照。授業で生徒に見せて反応を見たい。

【参考文献】

小松久男他編「中央ユーラシアを知る事典」 平凡社 二〇〇五
今谷明「中国の火薬庫 新疆ウイグル自治区の近代史」

集英社 二〇〇〇

新疆研究室（菅原純）

<http://www.3a.tufs.ac.jp/~sugawara/jsindex.htm>

日本中央アジア学会 <http://www.jacas.jp/meeting/index.htm>

Xinjiang Studies Site (新疆研究サイト)

<http://www.kashghar.org/>

<http://kokunotabi.webinfoseek.co.jp/silkroad/silk3.htm>

(シユメーク拡大画像)

